

防衛的悲観主義が課題遂行および唾液アミラーゼに与える影響

○荒木 友希子
(金沢大学文学部)

Key words: 防衛的悲観主義, 学習性無力感, 唾液アミラーゼ

【 目的 】

Norem & Illingworth(1993)は、学業達成場面における防衛的悲観主義(DP)および方略的楽観主義(SO)傾向の強い実験参加者を尺度によって抽出し、実験場面において認知的対処方略の採用を実験的に操作した後に課題遂行をおこない、遂行成績の差を検討した。尺度によって測定された認知的対処方略の傾向と実験的に操作した認知的対処方略が一致した場合、一致しない場合に比べて遂行成績がよいという結果が得られた。DP 者が課題遂行前に失敗や最悪の事態を想定してあれこれ考え込むのを妨害されると課題の遂行成績は悪くなったことから、その人自身の対処方略を採用することがその人にとって最も適応的であることが示された。本研究では、荒木(2005)の作成した学業達成場面の防衛的悲観主義尺度 (JDPI) を用いて日本人大学生を対象に同様の実験操作をおこない、Norem & Illingworth (1993)と同様の結果がみられるか検討をおこなうことを目的とした。また、学習性無力感パラダイムによって解決不可能な課題を経験する実験手続きを取り入れ、生理的指標としてストレスホルモンである唾液アミラーゼ活性値の測定をおこない、DP が失敗経験後の生理的ストレス反応に与える影響についても検討をおこなうこととした。

【 方法 】

【実験参加者】 荒木(2006)によって分類された DP 群 24 名、および、SO 群 20 名を実験参加者とした。JDPI を実施し、k-means 法による分割的クラスタ分析によって抽出された。【唾液アミラーゼの採取】 ヤマハ発動機株式会社の簡易ストレスモニター α -AMY Type2.0 を用いた。この機器は非侵襲的な唾液アミラーゼを用いた交感神経活性測定装置で、唾液採取から測定結果の算出までの所要時間は約 60 秒であった。【手続き】 個別実験。課題説明後、練習問題を実施し、その後条件毎に対処方略の操作 (6 分) をおこなった。続いて、3 種類の計算問題を実施した；第 1 課題：10 問 (7 分、すべて解決可能)、第 2 課題：全 20 問を 4 つに分け、5 問ずつ実施 (4 分、60%が解決不可能)、第 3 課題：10 問 (7 分、すべて解決可能)。また、唾液は以下のブロックに分けて 7 回採取した。(1)実験室入室後 (2)課題の教示後 (3)操作後 (4)第 1 課題後 (5)第 2 課題の途中 (6)第 2 課題(失敗経験)後 (7)第 3 課題後。【対処方略の操作】 Norem & Illingworth(1993)と同様の操作をおこなった。d 条件 (DP 方略)；これから行う課題に関する質問項目への回答を促し、課題の結果などについて想像させた。o 条件 (SO 方略)；これから行う課題について熟考するのを妨害するため、別の課題 (文字抹消課題) を実施した。

【 結果 】

各課題の正答率について、群×条件の分散分析をおこなった。その結果、第 3 課題(Figure1)に関して、群の主効果が有意傾向であった($F(1,40)=3.595, p=.065$)。第 1 課題では成績に差がなかった結果から、本実験における操作の効果は認められなかったといえる。また、失敗経験後の第 3 課題では、DP 群はより成績が悪く、失敗経験の影響が認められた。

唾液アミラーゼ活性値については、データの個人差が大きく、母集団の正規性に問題があったため、対数変換後に標準化した値を分析に用いた。SO 群と DP 群の間で差があるか、各ブロックにおいてマン・ホイットニーの U 検定をおこなっ

た。その結果、第 1 および第 6 ブロックにおいて 5%水準で有意な結果が得られた($U(20,24)=152.00, U(20,24)=141.50$)。第 1 および第 6 ブロックにおいて SO 群は DP 群よりもアミラーゼ活性値がより高かった(Figure2)。DP 群と比べて SO 群は実験開始前および失敗経験後のアミラーゼ活性値がより高い、すなわち、生理的ストレス反応がより高いことが示唆された。

【 考察 】

本研究の結果、これからおこなう課題への熟考を促す d 条件や課題への熟考を妨害させることを意図した o 条件の間には、成績や唾液アミラーゼ活性値に差は認められず、Norem & Illingworth(1993)と一致した結果は得られなかった。しかし、DP 群では失敗経験後の課題の遂行成績が悪く、唾液アミラーゼ活性値は低かったことから、DP 群では失敗経験後は課題に対する動機づけが低下したもののストレスをあまり感じていないという新たな示唆が得られた。一方、SO 群では適度なストレスを感じていたため、失敗経験後の課題の遂行成績がよかったと解釈できる。今後はより生態学的妥当性の高い実験場面や実際の学業達成場面においてさらに検討をおこなう必要がある。

【 引用文献 】

- 荒木友希子 (2005). 防衛的悲観主義尺度 (JDPI) の作成と信頼性、妥当性の検討について、日本パーソナリティ心理学会第 14 回大会発表論文集, 189-190.
- 荒木友希子 (2006). 防衛的悲観主義尺度 (JDPI) の構成概念妥当性に関する検討—k-means 法によるクラスタ分析の手法を用いて—、日本教育心理学会第 48 回大会発表論文集, in press.
- Norem, J.K. & Illingworth, K.S.S. (1993). Strategy-dependent effects of reflecting on self and tasks: Some implications for optimism and defensive pessimism. *Journal of Personality and Social Psychology*, 65, 822-835.

